映像とストーリーの美醜の認知
Beauty and Ugliness in Moving Images and Story Cognition

品原 誓也，滝沢 ゆり，奥村 咲香，金井 明人，
今井 友梨，稲葉 光海，柴内 夏希，田中 志歩，田島 響音
SINAHARA Seiya, TAKIZAWA Yuri, OKUMURA Sakika, KANAI, Akihito
IMAI Yuri, INABA Koumi, SHIBANAI Natsuki, TANAKA Shiho, TAJIMA Rizumu

法政大学
Hosei University
kanai@hosei.ac.jp

概要
映像による美的効果は虚構性によって高まり，映像による醜的効果は事実性によって高まると考えられる．これをふまえ，aiko の『プラマイ』(2015)のミュージックビデオと映画『ハッピーエンド』(2017, ミヒャエル・ハネケ)の，映像の美醜とストーリーの美醜の相互関係を調査し，６つの認知的効果に関する仮説を導き，さらにそれを基に同じストーリーを用いた美醜の異なる二種類の映像制作を行い，調査することで効果を検証した．虚構性を認知する映像と，事実性を認知する映像では，同じストーリーであっても美醜の効果が異なり，それは映像の修辞的側面に関する処理が影響している．

キーワード：美醜，映像 修辞，ストーリー

1. はじめに
同じストーリーを用いた映像であっても，映像の修辞が異なれば受け手への効果は変化する．例え，醜い事象を提示するストーリーであっても映像の撮影技法や編集技法などによって，受け手はそれを美しくも，醜くも認知する．映像を見るにあたって，受け手は，修辞的側面に関する処理とストーリー的側面に関する処理を同時に行っている．ストーリーが同一だとしても，修辞に関する処理が異なれば，強く生じる効果が異なってくるのである[1].

「映画ではすべての内面的なものが外面的なものにおいて認識されるのである」[2]と述べられているように，視覚的な美醜を通して，目に見えないものも受け手は認知する．映像がストーリーを通して描く現実社会や社会問題に対する認知も，映像の美醜に影響されると考えられる．

アラン(2015)は「美的感情なるものは虚構の可能性が高い」，また「感情は，行動や推理からではなく，瞑想からやってくる浄化作用によって美的なものとなる」と述べている[3]．美的効果は虚構性によって高まり，醜的効果は事実性によって高まるのではないだろうか.

宮尾(2019)は，日本映画の影の美学について論じ，宮川一夫の撮影に関し，現実を記録することを目指しているのではないとしている[4]．これも，美的効果は虚構性によって高まるためであろう．

虚構性と事実性は，物語(narrative)によって導かれる[5]．この場合の物語は修辞的側面とストーリー的側面の両者を含むが，特に，修辞的側面からの，映像と現実社会の関係に関する認知の誘導や操作は，デジタル映像とその加工の近年の一般化によって，より容易なものとなってきている．

本発表では，デジタル加工によって虚構性が強調されている例として aiko の『プラマイ』(2015, 丸山健志監督)のミュージックビデオを，またスマートフォンの画面の導入によって事実性が強調されている例として映画『ハッピーエンド』(2017,ミヒャエル・ハネケ監督)を分析することで，映像の美醜とストーリーの美醜の相互関係を調査し，６つの認知的効果に関する仮説を導き，それを基に新たに映像制作を行い調査することで効果を検証する．

2. 虚構性による美しさの認知に関する仮説
aiko の『プラマイ』の映像は，フィルム調の淡い画面など，多くのデジタル加工がなされており，虚構性が高い．また，ストーリーは，男性のストーカーをしている女性についてであり，男性の服を盗んで匂いを嗅いだり，髪の毛を拾って食べたり，男性の部屋の盗撮映像を見たりしている．

『プラマイ』は，受け手に醜的効果を生じさせる可能性の高いストーリーとなっているのだが，映像全体への印象は，ストーリーに対する嫌悪感が，映像の美しさによって緩和されている．映像による浄化作用が

生じているとすることができよう．これより，以下の３つの認知的効果に関する仮説を導いた.

Ⅰ. ストーリーに関係なく映像そのもので，美醜を認知することができる

Ⅱ. カット・カメラワーク・色味・ピント・スピード・音これら映像側の要素を修辞的に加工することで受け手にとって虚構性の高い映像になる

Ⅲ. 受け手が映像そのものに足して虚構性を感じた場合，映像のストーリーに対する美醜の認知は阻害される

虚構性による美的効果は，その修辞的側面に関する処理によって，受け手のストーリー的側面に関する処理を阻害あるいは緩和することができるのだと考えられる.

3. 事実性による醜さの認知に関する仮説

ハネケ監督による『ハッピーエンド』は，映像中で，通常の 16:9 の横長の画角から，縦長のスマートフォンの画角の映像に切り替わる部分が存在する．スマートフォンの画角の映像は私たち受け手が生活の中で見慣れているものであることから，事実性が高いと認知し得る.

ストーリーは，老人の自殺を孫が幇助するといった，残虐な社会問題に関するものである．映像が，横長の 16:9 の画角の部分ではストーリーの残虐性に関する処理は緩和されるが，横長のスマートフォンによる映像に切り替わると，受け手は一瞬にして畏怖感を抱くことになる．スマートフォン的な横長の画角の映像は，それ以前の整った構図とは異なり，映像の浄化作用によって残虐性が緩和されることがない．スマートフォン撮影などによる，事実性が高い映像による醜的効果は，ストーリーの残虐性を増幅させるのである．ここでは，新たに以下の３つの認知的効果に関する仮説を導いた.

Ⅳ. 映像側の要素を加工しない，また受け手にとって身近な映像は，受け手にとって事実性の高い(虚構性の低い映像)になる

Ⅴ. 受け手が映像そのものに対して事実性を感じた場合，映像のストーリーに対する美醜の認知は阻害されない

Ⅵ. 映像から形成された，受け手の美醜の認知によって，社会問題に対する捉え方が変化する

映画では，虚構性による美的効果によって，ストーリー的側面に関する処理が阻害あるいは緩和されがちである．事実の醜さを映像として提示し，醜的効果を生じさせるためには，美的効果を減じさせる映像修辞が必要になるのだといえよう.

4. 美醜の映像制作と調査

導いた仮説をもとに，いじめと飛び降り自殺という社会問題をテーマにし，残虐性のある同じストーリーを用いて，前述の仮説を基に 1 分弱の映像を二種類制作し，認知的効果の変化を検証した.

制作映像 A 「美しい映像を作る」ことを目的とし，シンメトリー構図やスローモーションやデジタル加工した色味，音楽を工夫した虚構性の高い映像技法を用いた．これらの映像要因からストーリーにおける美醜の認知は阻害され，映像の美しさによって残虐性が緩和される．つまり，映像による浄化作用が働く.

制作映像 B 「醜い映像を作る」ことを目的とし，インスタグラムのライブ配信を用いてスマホの画質をそのまま起用した映像技法を用いた．ストーリーにおける美醜の認知は阻害されず，残虐さは残されたままになる．つまり，受け手にとって虚構性の低い映像は，浄化作用が働かない.

制作した二種類の映像を交互に 12 名の参加者に見せ，インタビュー調査をしたところ，異なる手法の映像修辞によって，「自殺」という行為の美醜の判断が変化していることが 12 名全員について確認され, 制作意図通りの結果となった．また，いじめと飛び降り自殺という社会問題の残虐さへの捉え方についても，2 本の映像で変化がみられた.

美的効果は虚構性によって高まり，醜的効果は事実性によって高まる. 制作映像 A のように虚構性を認知する映像と, 制作映像 B のように事実性を認知する映像では，同じストーリーでも美醜の効果が異なり，それは修辞的側面に関する処理が影響している.

5. 映像による美醜の認知から社会問題へ

映像がストーリーを通して描く社会問題への捉え方も，映像への美醜の認知によって左右されることにな

る．社会問題をより直接的に映し出したい場合は，過剰な美醜の修辞は認知の妨げとなる．ドキュメンタリー映像などにおいて，過剰に美しい画面を避けることが多いのもこのためである．

逆に，美醜の認知を混在させることで社会問題に関する認知を変化させる試みもありえる．美しい映像に，犯罪行為のような美しいとはいえないストーリーが組み合わさった際，受け手は違和感を通して，そのシーンを強く記憶するとともにストーリーに関する美醜の認知に関する処理は緩和される．その後同じような情景の映像や似た行為を目撃したとき，その映像が想起されるようになる．美しいと感じた映像の記憶が，醜い社会事象に対する捉え方を変化させるきっかけになり得る．

参考文献

[1] 金井明人 (2008). “映像編集の認知科学”，『映像編集の理論と実践』，金井明人・丹羽美之（編），法政大学出版局，pp.13-38.

[2] ベラ・バラージュ（佐々木基一・高村宏 訳）(1986).『視覚的人間―映画のドラマツルギー―』，岩波書店.

[3] アラン （長谷川宏 訳）(2015).『芸術論 20 講』，光文社.

[4] 宮尾大輔（笹川慶子・溝渕久美子 訳）(2019).『影の美学 日本映画と照明』，名古屋大学出版会.

[5] Matravers, D. (2014). *Fiction and Narrative.* Oxford University Press.